連載　それぞれのアスベスト禍　その59

中皮腫・アスベスト疾患・患者と家族の会
古川和子

家族にとっての緩和ケアとは

春の足音が聴こえそうな、東北の仙台市に行ってきた。中皮腫患者C子さんとその妹のR子さんに会うため、早朝から飛行機で関西空港を飛び立ち、帰宅したのは23時を廻っていた。自分の年齢を考えるとかなり厳しい行程だった。しかしなぜか心地よい疲労感に浸りながらの帰宅だった。

右胸膜中皮腫で入院しているのはC子さん。先日49歳の誕生日を迎えた。発症したのは48歳だった。昨年から、宇部医療センターの岡部先生の紹介により妹のR子さんと連絡を取りはじめ、一度仙台に訪問しているがその時は姉のC子さんには面会していなかった。昨年C子さんは病状が進行し、それまでかかっていた大学病院から「緩和ケア」を勧められて、現在の入院先である「光が丘スペルマン病院」の緩和ケア病棟に入院した。

今回私が訪問するきっかけになったのはR子さんからの切実な訴えによるものだった。「姉は痛みが酷くて、硬膜外鎮痛法（脊髄硬膜外腔にカテーテルを留置し、鎮痛薬を持続注入。鎮痛薬が脊髄に直接作用し、運動機能を傷害せずに強力な効果を現す）を勧められています」と電話があった。しかし会話の最後に私がR子さんに言った言葉は「私は医者ではないので、お話を聴くことしかできません」という一言だった。もちろんその言葉を発するまえにはかなり長い時間のやり取りがあった。しかしどんな会話をしてもR子さんの心が落ち着けるような会話には結びつかなかったのだ。いくら医療的なことを尋ねられても私の知識や立場では、彼女が期待する言葉は何も引き出せない。「何か」を期待して電話してきたR子さんだが、私の最後の言葉にはしばし無言が続いた。

R子さんは積極的な方で、宇部医療センターの岡部先生を訪問してセカンドオピニオンを受け、聖路加国際大学の長松康子先生にも幾度となく電話やメールで相談していた。アスベストセンター東北の担当者尾形海子さんもかなり細かく対応している。そのような中で…きっと「最後に」私に電話がかかってくるというパターンがこの一年近く続いていた。

しかし「今回は違う」と、電話を切ったあとで私は心の中に残ったしこりの様なものを感じていた。これでよかったのか、と自問自答した。そして直後に「会いに行こう」と決意した。今後遺されるR子さんの人生のためには、最愛の姉であるC子さんをしっかりと見送るための心の準備が必要

光が丘スペルマン病院HPから

だった。その準備ができないから苦しんでいるのだ。

これもまた緩和ケアのひとつである。患者を見守る家族のケア無くして、患者自身のケアはあり得ない。

訪問した病院は仙台市内にある「光が丘スペルマン病院」だ。以下病院のＨＰからの抜粋でご紹介したい。

あなたの尊厳を守り
あなたの全てを受け入れ
あなたに奉仕させていただきます

治癒不可能な疾患の終末期にある患者さんとご家族のクオリティ・オブ・ライフ（生活の質、生命の質）の向上のために、ホスピスケアは、さまざまな医療の専門職が協力して作ったチームによって行われます。

病気を治すための治療は行ないませんが、身体や精神的な苦痛の緩和を積極的に行ない、患者さんが最後まで一日一日をその方らしく送っていただくお手伝いをいたします。

＜医師からの一言＞

当施設は、市民グループ「ホスピス設置を願う会」の長年にわたる積極的な活動が実を結び、平成10年5月宮城県では初めての緩和ケア病棟（ホスピス）として開設されました。現在でも多くのボランティアが内外から緩和ケア内科を支えて下さっており、「地域との連携」という21世紀の理想の医療モデルとしても注目されています。

緩和ケア内科では病気を治すための治療は行いませんが、痛みなどのつらい症状については積極的に緩和を行います（緩和医療）。同時に心のケアにも重点をおき、病の苦しみと闘うだけの日々から心身ともに解放され、その方らしく生きていただけるように、スタッフ一同がお手伝いさせていただきます。

姉が同病院に入院できた時は、Ｒ子さんから喜んで電話があった。しかし先日の電話では「思ったほどではなかった」という期待外れの言葉が返ってきた。その理由は、ただひとつ「痛みの症状が改善しないから」だ。中皮腫の進行に伴い最近は痛みも酷くなっている。病院からは硬膜外鎮痛法が提示されたが、決断するには勇気が必要だった。そこで「Ｒ子さんの背中を押そう！」と尾形さんを誘って面会にいった。

ゆったりとして半個室（といっても、入り口で別れるのでほぼ個室）の病室は外観もよく、桜の木が早くも芽をつけていた。

Ｃ子さんは寝たままだが会話に支障はなく、やせ細った顔も笑みを浮かべて私たちを迎えてくれた。体調のことなどしばし話が弾んだところで…切り出した。「ところでお仕事は美容師さんでしたね。そのころ

のお話をすこし」と。

嫌な顔もしないで美容学校卒業後からインターン時代の作業を話しはじめたC子さんに、私は安心した。今回の訪問目的のひとつが、C子さんの石綿ばく露原因を探ることだったから。その瞬間、私の背後にいる尾形さんの顔は見えなかったが緊張感が伝わってきた。会話が始まるとノートを出してメモをしている気配がした。C子さんは美容師を10年間、その後はボディケアの関係の仕事をしていた。私の予測が当たっていたら、きっと美容師の時代に石綿を吸っていると思う。

訪問予定の時間を超しての、聞き取りにも頑張って答えてくれたC子さん。再び会える日があることを願いながら病院を後にした。

帰りの機内で一日の出来事を振り返っていたら片岡さんの言葉を思い出した。「早く行け、すぐ行け！」。患者さんがいると伝えると片岡さんは大きな声でそう言った。その言葉が今も私を動かしているような気がする。

今回の患者さんはR子さんだったかもしれないが、もしかすると意外な展開になるかもしれない。今後はC子さんの労災認定を巡って尾形さんの奮闘を期待している。

R子さんたちは父親を数年前に亡くし、母親と姉妹の3人で寄りそって生きてきた。その3人の女性が抱えている大きな悲劇。きっと誰かに背中を押してほしくなる時がある。他の事例でも幾度となく直面した状況だ。

患者と家族の会の役割はそこにも大きな意義があった。

岩波新書

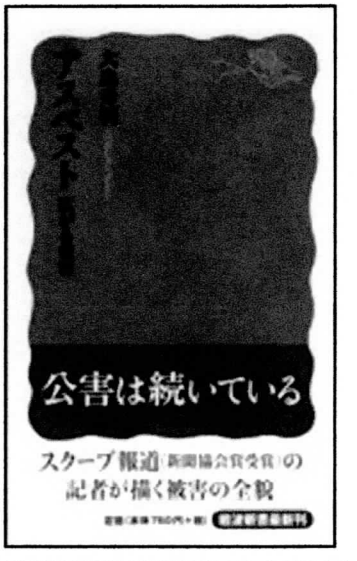
アスベスト 広がる被害

大島秀利（毎日新聞社編集委員）

公害は続いている

2005年6月、兵庫県尼崎市でアスベスト公害が起きていることが発覚し、「アスベストショック」が日本列島を襲いました。それから6年が経ち、アスベスト問題が報じられる頻度は少なくなりましたが、いまでも被害者の方々が増えており、私たちがアスベストを吸う危険も残されています。

なぜ対策が遅れているのでしょうか。これからどうするべきなのでしょうか。本書では、被害者の声を紹介しながら、この問題について考えていきます。

著者は「アスベストショック」のきっかけとなった記事を報じた毎日新聞の記者です。どのような経緯で取材が進められていったのか、報道の裏側についても詳しく述べられています。（新書編集部）

価格：820円　岩波書店